

#S3 アンドリュー篇 2 -T.C.4755～4767-

来るな――――
なぜ、お前たちが現れる――
お前たちが、俺を否定しようとした。
だから、その前に俺が、お前たちの存在を否定したのだ――
もう、終わったことだ――
お前たちは存在しないんだ。
なのに、なぜ――――

#S3 アンドリュー篇 2 -T.C.4755～4767-

アンドリュー： う、うううううう――――
マーグリス： ふ、鼻孔がくすぐられるわ。
突き刺すような濃密な死臭。
その主が、このザマか――
アンドリュー： お、俺は、俺は――――
マーグリス： 単独で、この施設の全職員と連警特殊部隊三個小隊を全滅させたと聞いて、
どんな奴かと期待していたが――まるで捨てられた子犬のような目をしている――――
本当にお前がやったのか？
アンドリュー： うあああああああああ！
マーグリス： 愚鈍な――！
この俺を、貴様が破壊しつくした肉袋と同等にでも思ったか？
アンドリュー： ぐうううう――――

マーグリズ：とはいえ、やはりライフリサイクルの変異体だけのことはあるか——なるほど、連警が手に負えんわけだ。
それは賞賛しよう——だが——！

アンドリュー：ぐああああ——

マーグリズ：貴様などに見透かされるような隙など、持ち合わせておらん。現実とはこんなものだ——

アンドリュー：ううう——

U-TIC 機関員：マーグリズ司令、ウルガータ第 308 方面軍が——

マーグリズ：わかっている、急ぎこ奴を収容せよ。

U-TIC 機関員：まさか——連れていくのですか！

マーグリズ：ああ、こいつはものになる。

U-TIC 機関員：ですが——

マーグリズ：お前はただ、その存在を人の中に遺したかっただけだ。———そうだろう？

アンドリュー：あああ———

マーグリズ：お前が存在している証を見せてくれ——この俺だけに———

そうだ——

この瞬間まで、俺の存在は、

絶えず否定という、重く抗いがたい存在に押しつぶされてきた。

弁護士：——いまもって、被告人のその出自は不明です。戦時中の混乱に紛れたか、

もしくは”あえて紛れさせられた”のか——これはある意味に於いて、

被告人自身もライフリサイクル法の被害者であると言ってもよい事象を表しています。

その被害者を、数千年ぶりに執行されることになった死刑制度、最初の犠牲者にしてよいものなのか。

たしかに、被告人は犯したその罪を償わねばなりません。

しかし、そのための多岐に渡る贖罪の方策が、人類の意識と科学の発展によって、

生み出されてきたのではないのでしょうか？ どうか、寛容かつ、聡明なご判断を。

裁判官導官：——当法廷は、被告アンドリュー・チェレンコフに、第七種人格矯正処置を言い渡すものとする。

弁護士：いままでのあなたはなくなった。でもそれは、新しいあなたの世界の誕生なのよ。

さあ、それを祝福しましょう。

———私と一緒に。

アンドリュー：——君と、一緒に——？

アンドリュー：き、君———

こんな通知が届いているぞ——

アンドリューの妻：あら——見てしまったの？ 受取人指定のはずだったのに。

アンドリュー：セルフクロニング完了通知、これはどういうことなんだ！

アンドリューの妻：ご覧の通りよ、私は自分の後継者として、私の遺伝情報をすべて受け継ぐ存在を求めている。
その夢が、かなったのよ。

アンドリュー：なぜだ、どうして僕たちの子供じゃ駄目なんだ？

アンドリューの妻：やめてよ、あなた——なにを遺したいというの？

まさか、異常をきたしたその遺伝子だなんて、言わないでよね。

ナノ技術は万能ではないわ、ゲノムの多様性までは補正できないのよ。

アンドリュー：僕の遺伝子に異常があると言うのか？

アンドリューの妻：見苦しい執着ね。あなたの遺伝子が、たかが核酸の分際で、生にしがみついているよう。

まるで、あの時のあなたみたい。当然よね——あなたを形作っている”モノ” なんだから。

アンドリュー：なら、何故——君は僕と———

アンドリューの妻：その通知のためよ。

——この許可を得るため、これまで私がどれだけ努力してきたと思っているの？

ボランティアよ、ボ・ラ・ン・テ・イ・ア。

私たちの間に愛情があったと思って？ 冗談はよしてちょうだい、そんなもの——その抑制剤で十分なのよ。

アンドリュー：この薬を服用するのは、とても苦しい。でも——それが君への愛の証だと——

アンドリューの妻：ええ、私は切に望んでいるわ。いざというとき、管理責任を問われるのは私なんだから——

アンドリュー：管理——責任——

アンドリューの妻：な、なによ——第七処置を受けている割に、不穏な眼をするじゃない。

アンドリュー：———

アンドリューの妻：さ、下がりなさい、私から離れて———

いやあああああっ！

補正指導官：———連邦法の定めにより、これより第八種人格矯正処置を行う。これより、被告人個人の権利は

12584 項目に渡って剥奪され、以後、被告人は連邦に隷属する一生命体として扱われる。

この処置は、現行法におけるレアリエンと同等の資格を有することを意味するものである。

アンドリュー：あああああ――――

アンドリュー：（俺は――存在する――――
この世界に――存在する――――
誰にも――否定はさせない――――）

???：――――――

アンドリュー：あ――――

???：おじさん、まだ――――

アンドリュー：あああああ！

???：まだ、この世界にいたの――

アンドリュー：うわあああああああ！

補正指導官：しかし――ここまで強固なネットワークは見たことがない。

第八種矯正処置を受け付けないとはな――

補正指導官：いずれにせよ、貴重な存在だよ。とりあえずは第九処置のサンプルとして――――
ん？

補正指導官：こ、拘束具が緩んでいる？

補正指導官：や、やめろ！

マーグリズ：お前が存在している証を見せてくれ――この俺だけに――――

アンドリュー：マーグリズ司令、連結実験――準備整いました。

60 分後に第一段階[フェーズワン]に入ります。

マーグリズ『うむ――エミュレーターとはいえ、ゾハルだ。慎重に行え。』

アンドリュー：はっ！

あの、司令――何故、この任務を私に――

マーグリス『貴様の組織への忠誠を見たかった、――それだけだ。

成功しても、失敗しても、その惑星、アリアドネの住民はまともではいられない。

――躊躇っているのか？』

アンドリュー：いえ――私にとって、不要な者たちです。組織や世界にとっても――

マーグリス『いい答えだ、アンドリュー。結果を楽しみにしているぞ。』

アンドリュー：（間もなく、俺はこの惑星を離れる。そして、二度と訪れることはないだろう――

いや、俺だけではなく、誰もこの惑星を訪れることはなくなるだろう――

そして、俺を否定した者たちも存在しなくなる――）

そして、俺は――